



ハーモニー

校訓
自主創造
協力

R7. 3. 6(木) No.23 小柳弘志

3年生修了式、明日は卒業式

中：全日制、午後：定時制)に参加しましたが、感動的な式でした。先輩、後輩の関係は本校にも通じるところがあり、中学校卒業式の事を考えずにはいられませんでした。定時制卒業式の送辞、答辞の一部要約を紹介しします。

【送辞より】

・私は中学生の頃、学校に行かなくなりました。家族の支えもあり入学しましたが、とても不安でした。そんな不安でたまらなかった私に、声をかけてくださったのが先輩方でした。歓迎球技大会の時、「君、ドッジボールうまいね、一緒に頑張ろうね。」その言葉は笑顔とともに私の脳裏に鮮明に残っています。優しく声をかけてくださったおかげで、学校に行く事が怖くなくなりました。

・本年度最後の生徒会行事で4年生の先輩方全員から在校生に言葉をいただきました。学年を超えて仲間を大切にされる先輩方の姿を私は忘れません。「星空のもと、夢を切り拓く、ここから始まる新たな一歩」、これは今年度、岱志高校定時制生徒会スローガンです。宙、わたる教室で夢を追いかけて、新たな一歩を踏み出そうとされている先輩方、この先、幾多の困難が先輩たちの前に立ちはだかるかもしれせん。そんな時は「荒定ファミリー」を思い出し、乗り越える糧としてください。ご卒業おめでとうございます。

【答辞より】

・私は77歳です。19歳で自衛隊に入隊。54歳の定年まで勤め、次の第2の人生も終わり、日頃は野菜作りなどをしていました。そんな折、遊びに来ていた友人が「夜間高校に行ったら？」と入学を勧めてくれました。ちょうどその頃は、残りの少ない人生で何ができるかを考えていた時でした。「人生のやり直しはできないけれど、学び直しはできるかもしれない。」と思い入学を決心しました。授業が始まると、それはとても新鮮なものでした。60数年前とは変わっていました。先生が教えてくださる事が分かるように、家では予習復習を繰り返しました。「恥はかきたくない、迷惑はかけたくない。」の一心でした。教科の授業以外では、「荒定祭」等、生徒会役員が創意工夫した学校行事はとても楽しいものでした。特に印象に残っているのは、令和5年度熊本県高等学校定時制通信制文化祭での発表です。我が岱志高校からは先輩が「定時制のボクサー」という題で発表されました。学業とアルバイトに励みながらプロボクサーを目指す内容です。生き生きと、堂々と発表される姿にはとても感動しました。また刺激も受けました。これが教育の力だと痛感させられました。

・家族は大切な存在です。友はそれと同等、またはそれ以上に大切なものかもしれません。この4年間、私が無欠席を続ける事ができたのも、友の力によるものです。足が腫れあがった時も、何人かの友が交替で送迎してくれ、何とか出席する事ができました。「友は一生の宝」と思っています。私たちは4年間、考える力と行動する力を、授業を通して教えていただきました。これをもってすれば、どんな困難でも乗り越える事ができると信じています。そして地域貢献できる、人の役に立つ社会人となり、いずれは地上の星となって輝く事を誓います。岱志高校定時制には「荒定ファミリー」という素晴らしい伝統があります。「荒定ファミリー」は、みんなが強い絆を持っていて、第2の家族だと思っています。最後になりますが、私達を支えてくださった多くの先生方に心からお礼申し上げます。本日ご臨席くださいました皆様のご多幸と、母校のますますの発展を祈念し、答辞といたします。「先生、ありがとうございます。」

※岱志高校のように生徒が誇りを持って卒業できる学校が地元にあります。素晴らしいと感じます。明日の卒業式でも感動的な場面が多くあると思います。後日、卒業式の様子はお伝えする予定です。



卒業生に最後の話

1日早いですが、卒業生の皆さん、保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。今年も読書を通して、たくさんの事を教えてもらいました。最後に1つ紹介します(抜粋)。



夢を叶える勇気をくれた2人

神奈川県39歳中学校教員

・小学校卒業直前の冬に、仲良しグループから仲間外れにされてしまった。原因は自分の日々の言動にあった。解決は困難を極めたが、そんな私のために、担任の先生は時に寝ずに悩み、時に目を真っ赤にして話を聞き続けてくれた。

・「もし目の前に川があって溺れている人がいたら、助けるだろう。その人が何をしたらいいのかそんなことは二の次だ」と、学校へ行くことが苦しくてたまらなかった私の味方でいてくれた。他人のためにここまで一緒に考え、助けてくれる人がいるのか。私も学校の先生になって、生徒に寄り添える人になりたいと、その夢が原動力となり、様々な困難があっても、迷いなく突き進むことができた。

・しかし、初めて挫けそうになったのが教育実習だった。1ヶ月前から名簿をもらい、名前を暗記し、髪も人生で初めてショートカットにした。人一倍大きな声で挨拶し、生徒下校後に靴箱を見て、かかとを踏んでいる子の履きを直そう。生徒との日々にも全力で向き合うと決めていた。

・実習は3週間。最初の2日は物珍しさに声をかけられたが、あっという間に、向こうから近づいてくれる事はなくなった。会話が続かない。実習仲間の方が生徒との距離が近いように感じ、私には教師の素質がないのかもしれないと思うようになった。

・生徒との距離が縮められないまま1日が過ぎていく。1週目の週末には、帰りのバスを待っていると涙がこぼれ、ベンチで途方に暮れた。これまでの日々は一体何だったのだ。向き不向きがあるとすれば、向いていないのだろう。なぜそのことに気づかず、独りよがりの努力をし、邁進してきたのか。そう思うと虚しくて、初めて夢がぼやけてきた。

・しかし、ふと、6年生の憧れの先生が思い浮かんだ。先生はいつも提出物に綺麗な字でコメントをくれた。それが嬉しくて、返却が待ち遠しかった。あと2週間、もしかしたら先生として生徒の前に立てる最後かもしれないから、私も生徒のプリントにたくさんのコメントを書こう。赤いボールペンを買って、この1本を使い切ろうと決めた。

・そして始まった2週目。こちらがたくさんコメントを書くと、生徒もいろいろな話を書いてくれるようになった。「先生、今度卓球部を見に来てください!」「授業で褒めてくれて嬉しかった」「明日は挙手します」等。お弁当の時間も、コメントのやり取りのおかげで会話が弾むようになってきた。

・ある日、コメントの情報をもとに、無口でおとなしい子に「料理が得意だね?将来はシェフになるのかな?」と声をかけてみた。すると、にこり。周りの子も「そうなの?」と驚いている。「お弁当も時々作る」と言ってくれた。「食べてみたいね」とみんなで新たな一面を知った喜びを分かち合い、とても温かい雰囲気になった。赤いボールペンがまさに1本なくなりかけた頃、実習最終日を迎えた。

・笑顔で実習を終われるのか?また強い気持ちで夢を追いかけて続けられるのか?そう考えると私の顔は曇ってしまった。その日のお弁当の時間、ある子が「先生、見て!このチャーハン、作ってきたんだって」。シェフになりたいと言っていた子のお弁当を指差している。照れくさそうに、「先生、今日最後だから」と差し出してくれた。「え?食べていいの?」、「先生の分」とその子はにっこり。その瞬間、涙が目にとまってきた。とんでもなく大きな勇気をもらった気がした。「めちゃくちゃ美味しい!」と言ってその子を見ると、またにっこり。私自身、実習一の笑顔があふれていたと思う。

・「朝早くから大変だっただろうな、一生懸命作ってくれたんだな」。そう思うと言葉にできない幸せな気持ちでいっぱいだった。その日はたくさんのサプライズを経験し、1週目の週末とは真逆の、笑顔いっぱいの涙顔で教育実習を終えることができた。

・今、私は中学校で教員をしている。あの時もらった勇気のおかげで、諦めずに夢を叶えることができた。教育は愛だと思う。さまざまな問題に直面しても、生徒と愛を持って向き合うことを大切にしている。それは恩師が見せてくれた姿だからだ。不器用でも愛を持って接すると、その何倍も温かいものを返してくれる。私に勇気をくれたあの生徒に、そして日々たくさんの笑顔をくれる教え子たちに、心から感謝している。ありがとう!

「自立した人間」=(自分でできる事を増やす人)+(周りから元氣や勇気を貰える人)だと思います。次のステージも笑顔にっこり、輝いてください。